

## 6 カンキツ「不知火」の雨よけ栽培による高品質果生産

### ねらいと成果

カンキツ「不知火」は果梗部が突出する、いわゆる「デコ」が発生するという特徴的な形態と、その優れた食味から消費者の嗜好性が高い。各地で生産量が增大する中で、今後有利に販売するためには、酸含量が低く食味良好で、外観も良い高品質な果実を生産する必要がある。

「不知火」は、温度要求量が高い、果皮が弱く雨や霜によって障害を受けやすいといった特性をもつ。品質の良い果実の生産のためには、これらの特性を考慮した栽培方法を用いなければならない。

そこで、保温による生育促進、障害果の発生の防止と果実品質の向上を目的として「不知火」の雨よけ栽培を検討した。雨よけ栽培では露地栽培に比べて、大玉で酸含量が低く、着色が良く果皮のなめらかな高品質果実が得られることが明らかとなった。

### 内容

雨よけ栽培および露地栽培のナルト中間台「不知火」5年生樹の果実について、1999年9月下旬から随時、重量、糖度、酸含量、着色度を調査した。雨よけ栽培には、間口4m、高さ3.2m、奥行き11mのパイプハウスを使用し、3樹を被覆した(図1)。

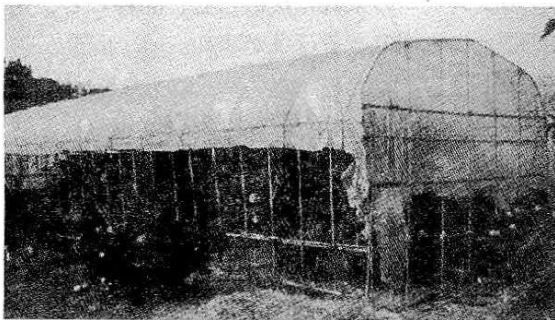


図1 不知火の雨よけ栽培

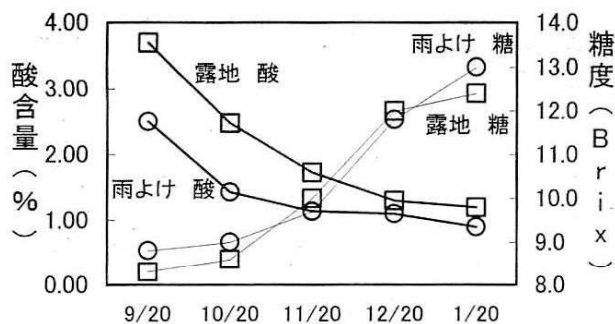


図3 糖度および酸含量の推移

天井のビニルは周年被覆とし、側面は開放した。雨よけ栽培、露地栽培とも樹容積1㎡あたり10果となるように摘果を行った。

雨よけ栽培では果実重が露地栽培と比較して50g程度大きくなり、1月下旬で300g以上になった(図2)。糖度の上昇に大きな差はなかったが、酸含量は9月下旬で雨よけ栽培の方が1.2%程度低く、その後も酸含量の減少が早かった(図3)。「不知火」の出荷時の酸含量は1%以下が目標であり、雨よけ栽培では1月下旬にこれに達したが、露地栽培ではこの時点で1.2%であった。着色は露地栽培と比べて1か月程度早く進行し、12月下旬に完全着色した(図4)。雨よけ栽培の果実は露地栽培の果実と比べて、傷が少なく果皮がなめらかであった。

以上の結果から、「不知火」の雨よけ栽培は、食味、外観ともに良好な高品質果実が得られ、有利販売に結びつくものと考えられる。

### 今後の方針

雨よけ栽培を連年続けた場合の生育、果実品質への影響と、適合する栽培管理について検討する。

齋藤 隆雄(淡路農技・農業部)

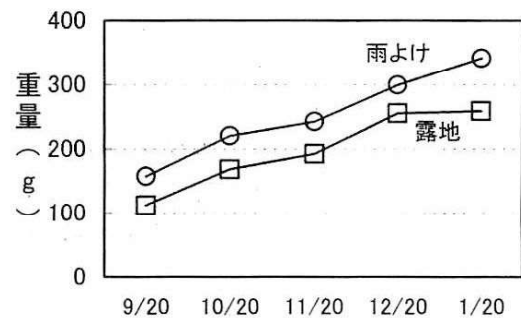


図2 果実重の推移

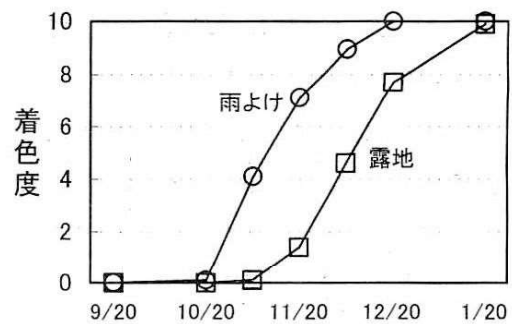


図4 着色度の推移